

監修の序

がん薬物療法はすべてハイリスクである。疾患そのものがハイリスクなうえに使用する薬もハイリスクである。加えてがんの病態により、あるいは合併症によりリスクは高まるが、実臨床では高リスクでもがん薬物療法を施行する状況にしばしば遭遇する。全身状態の悪化、気道・消化管・尿管の閉塞、肝転移による肝障害、嚥下障害による低栄養など、がんに伴うリスクのほかに、がんは高齢者に多いために、腎障害、肝障害、間質性肺疾患、糖尿病、心血管障害やその後遺症など、がんとは直接関係ない合併症を有していることも多い。これらはすべて抗がん薬治療のリスクを上げる。がんの病態とリスクの種類と程度を総合的に判断して、治療の適応と、抗がん薬の種類、用量・用法を決める必要があるが、そのためのエビデンスが少ないのである。

本書はそのようなハイリスク患者のがん薬物療法の考え方、実際をまとめた。実地診療のなかでハイリスク患者のがん物療法を実際にを行い、その際に、悩み、論文を調べ、少ないエビデンスのなかで臨床判断を行ってきた最前線で活躍している方に執筆をお願いした。がん治療はチーム医療である。医師だけでなく薬剤師や看護師の知識、技量を最大限に活用して診療にあたる必要がある。ハイリスク患者ではなおさらである。本書には日常診療で実際に経験したハイリスク患者のエピソードも盛り込んである。必ずや実地診療の役に立つはずである。大きさもポケットサイズにまとめたので、ぜひ日常診療で携行し役立てて欲しい。本書がハイリスク患者のがん薬物治療に貢献できることを願ってやまない。

2017年7月

神戸大学大学院医学研究科 腫瘍・血液内科
南 博信